〔書評〕

『日本貧困史』吉田久一著・一九八四・一月（川島書店刊）

小倉襄二

I

綱淵謙錠の歴史を素材とした評論集に『夜明を駆ける』という作品がある。このなかで―飢えから解放されたとき、人間ははたして他人との連帯に恋々とするであろうか。死への恐怖から自由になった人間に、他人との連帯といった意識はわずらわしさ以外の何物でもないだろう。人間はそれほどエゴイスティック（自己利益中心）な存在なのである。ここから混乱が生じた。飢えから解放されて、つまり〈豊かな社会〉に突入した現代日本人は、個人間の連帯を放棄し、他人に無関心になり、あるいは他人を人間とは考えずにもの扱いにし、この結果、各自が孤独地獄のなかで凍結しはじめている―と。

私はこの箇所をよんで秀れた作家の眼の的確さに教えられた。飢えは「貧困」の原点であった。河上肇の名著『貧乏物語』（大正六・三）弘文堂書房、『第二貧乏物語』（昭和五・十一・改造社）、さらにさかのぼって横山源之助『日本之下層社会』（明治三二・四・教文館）など著名なわが国近代史上の貧困を扱った著作をあげるまでもなく、そこには日々の生活のなかで綱淵謙錠のいう飢えに迫られた人々の生存の諸相が語られていた。そこに社会問題の枢要の課題があった。しかし現時の社会状況においてわが国においてこうした原点としての飢えと貧困の脈絡をたどること、あるいは、そこに論証の主軸をおいて討究することはほとんど意味を喪ってきている。たとえば、戦後史のなかで、貧困の実証や検証の枠ぐみ、方法論についても飢えからの脱却〝ゆたかな社会〟のなかの貧しさ（poverty in plenty）へと推移していった。大河内一男、篭山京、江口英一、小沼正など各研究者の著作のそれぞれに戦後貧困研究史としてこの推移は跡づけうると考える。

本書は、こうした推移と現段階の一つの集約という位置をもつ労作である。その標題はきわめて簡潔に『日本貧困史』となっている。吉田久一氏はわが国の日本社会事業史のもつともすぐれた

研究実績を積んでこられて、この分野で〝吉田史学〟とも称されるような広く深い研究成果を数多く公刊されてそれぞれの論稿は私たち社会事業史に関心をもつものにとってはつねに基礎に据えて教えられてきた。その意味では、本書も同氏の他の社会事業史研究の著作との関連において読みとる必要のある部分がきわめて多い。しかしながら、とくに「貧困」の歴史的な推移を一書にまとめあげている点において著者の数多い関連著作のなかでも独自の研究成果とみることができる。

II

本書は全体を十一の章によって構成されている。貧困史として古代律令社会、中世封建社会（一章・三・四）から近世封建社会（二章）、幕末・明治維新期（三章）原始的蓄積期（四章）産業革命期（五章）明治末・大正初期（六章）、独占資本主義確立期（七章）昭和恐慌期前後（八章）、戦時国民生活（九章）、戦後国民生活（十章）現在・高度成長・減速経済期（十一章）、という貧困を扱う時代・時期区分となっている。貧困史分析の比重は著者の従来からの研究領域との関係もあって近世期以降に重い。とくに明治維新期から戦時国民生活にいたる貧困の史的分析が中心となっている。この点は著者の『日本社会事業の歴史』、あるいはとくに『現代社会事業史研究』（一九七九・九勁草書房）や『昭和社会事業史』（ミネルヴァ書房）の史的研究を背景とするものでこの期の論述に重点がおかれているようである。

『日本貧困史』

第一章のなかで、とくに、貧困と社会福祉についての課題提起がなされていて、本書の構成の意図が語られている。この要旨は、たしかに貧困研究の数は多いが、一定の共通見解が成立せず、貧困をどうみるかという視点が先行している。それに対して、著者は、しかし、貧困者はいつの時代にも、全国民の何割かに達し、貧困は各方面と社会関係を持ちつつ、国民生活に特定の文化を形成してきたこと、この事実の実態解明に注目することが理論研究に先立って行なわれねばならないと語っている。方法としては、社会福祉との関連において、貧困は社会的・歴史的規定をうけ、人々の日常生活の現実面に現われることさらに貧困は、客観的説明で終る理論認識にとどまらず、解決が要請される実践認識の対象であることの認識をもとめている。

さらに、史的分析の概念として貧困現象とその本質の統一の場としての「不安定階層」と呼称することの現実や、貧困の階層化について、「貧窮人」の用語から「下層社会」、被救恤層、被救護層、要保護層、被保護層、低所得層などのカテゴリーについての一定の史的分析上のキイ・ワードとしての整理がされているのも興味ぶかい。さらに〝生活者〟論からの貧困者像にいたる設定が提起されている。

日本貧困史成立の困難、隘路についても、その方法論、〝遅れてきた科学〟としての福祉研究の状況とのかかわりで著者の提言は示唆に富んでいる。いわゆる一般史との関係について、資料面についても多くの研究史の分野が関連する。著者によれば(1)労働

問題史（大河内一男・隅谷三喜男・津田真澂氏らの分析）(2)生活構造論（中鉢正美・中川清氏）(3)民衆史研究（柳田国男）(4)被差別部落（賤民史）(5)諸外国の貧困研究の受容（C・ブース・S・ラウントリー・江口英一氏ら）以上をマクロの例として、ケース研究を各時代を時期にわたって採用すること。たとえば池上彰房「後期江戸下層町人の生活」など、その他、近代では類書はきわめて多いが、大正中期の村島帰之『生活不安』（一九一九）などをケース研究の見本として例示している。ケース研究とは一応別の関連領域として「貧困調査」についての公・私の多彩な研究、その資料が貧困史研究のなかに位置づけられることを指摘している。

このような貧困史研究の方法論上のむつかしさ、独自領域の構築の困難さについての自覚のうえにたって詳細な歴史的事実の探求とその記述が展開されている。その意味では本書によって、日本史の総体としての流れに沿って歴史的事実としての貧困の史的展開を〝通史〟として認識することができる。それは、ぼう大な容量であるので、さきに触れた時代・時期分析の比重のアンバランスもあるが、本書によって、通史としての貧困の推移の歴史認識をまとめて得られることになる。とくに近世→幕末→明治維新→近代、戦時・敗戦にいたる部分については、行政資料、ルポルタージュ、統計類、個人の著作などが広汎、徹底して渉猟されていて、貧困をベースに日本資本主義発達史と福祉史の相関をたどるうえで本書の果す役割はきわめて大きいといえよう。それぞれの分析に著者の日本社会事業史についての集約と理論上の整理がつけくわえられていて新しい歴史課題についての未開拓分野への指唆を数多くみいだすことができる。

Ⅲ

はじめに、本書を扱う前提に綱淵謙錠のコトバをあげたが、論述の比重はすくないとしても、本書が今日刊行された意味の一つは、はるかな通史を経由して戦後史—現在の貧困にまで論証が到達している点である。私たちは、温故知新とか、〝すべての歴史は現代史である〟（クローチェ）などのコトバをかさねてみるが、貧困研究にとってはこの貧困史研究が現在にまでゆきついていることをとくに重視したいと考える。すでに第一章においても英国の Peter Townsent の提起した relative deprivation や江口英一氏の『現代の「低所得階層」』など現代における重要性についての指摘があるが、戦後国民生活の貧困から現在の貧困にいたる記述が今後の研究テーマを内包して提起されている。この部分については著者においても、たんなる諸説の引用や仮説として述べられている部分も多い。私としては、あらためて、現代のわが国の貧困について、この〝貧困史〟がさししめすものを要説としてそれが大胆な仮説であってもくみこんでほしかったと思う。

さきのP・タウンゼントの一れん著作のみならずR・テイトマス、江口、小沼氏との貧困論、さらに、J・K・ガルブレイスによる『大衆的貧困の本質』都留重人監訳・（T・B・Sブリタニカ）西川潤・『貧困』—二十一世紀の地球—（岩波ブックレット・

№18）などの世界的な比較テーマ＝国際化の視野と日本の貧困についての課題枠の拡大もある。それぞれの国、とくに発展途上国＝〝南北〟問題などがとくに貧困論に入りこんでくる。

冒頭における実感もふくめて、たとえば、私自身〝貧困〟という単独の主題では現代のテーマはくくりきれないで「貧困・生活不安」とかさねたタイトルにする外なかった経験がある。小倉襄二・真田是編著『貧困・生活不安と社会保障』（一九七九・一二・法律文化社など）こうした点もたんに現代の貧困についての定義のむつかしさ、多様、多義性としてかたずけていいのかという疑問がのこっている。

本書の現在の貧困（十一章）については、当面の私たちのこうした疑義について直接には答えるものにはなっていない。これは、むしろ著者が後につづく歴史研究者に対して、まさに現代史の主題として貧困を位置づけて、その解明への努力を継続することを要請しているとうけとるべきではないだろうか。

著者、吉田久一氏は、一九一五年に新潟で生まれ大正大学文学部を卒業された。日本社会事業大学において永年の研究・教育にたずさわり現在日本女子大学教授、日本社会事業大学名誉教授である。私自身は日本社会福祉学会、社会事業史研究会などを通してつねに直接、間接に、研究上の指唆、教示をうけている。

著者の「あとがきに代えて」によるが、この『日本貧困史』はライフワークともいうべき将来の『日本貧困史研究』ができるまでの捨石の一つとしての概説書と考えているとしるされている。

『日本貧困史』

私自身は従来の著者の研究成果との関連もあってこれは多くの未完の主題をもつつみこんだすぐれた研究書としてみてゆきたいと考えている。

（吉田久一・『日本貧困史』・一九八四・一・川島書店刊・四八二頁）